

Weekly Survey

世界各地で聖母マリア崇拜熱が高まる中、マリアの解釈をめぐる新たな論争も。民主党大統領候補として有力視されていたクオモ N.Y.州知事が不出馬表明。同党の候補者選びは振り出しに。台湾国民大会代表選挙は国民の現状維持指向を反映して与党国民党が圧勝。

中嶋嶺雄

1月中旬の湾岸戦争勃発から12月末のゴルバチョフ・ソ連大統領辞任まで、その間にモスクワ政変ドラマに端を発したソ連共産党消滅とソ連邦解体を経て、1991年は20世紀の総決算とも言えるような大転換の1年であった。この1年間、*TIME*は実にリアルにこのような世界の動きの深部を捕らえて報道してきたが、今週号の"IMAGES 1991"(pp. 22-41)は、*TIME*ならではの写真によってそれらの出来事を回顧している。湾岸戦争でのイラク軍、兵士を送り出す米国、"WAR!"という見出しが紙面の半分以上を占める新聞を読みふけるイリノイの小さな町の青年たち、クウェートの惨劇、モスクワ8月政変、ユーゴスラビア内戦、イタリアへ大挙して押し寄せるアルバニア難民、フィリピンでのピナトゥボ火山爆発、バングラディッシュの台風被害などの写真による激動の1991年の再構成である。この特集だけでも今週号は末長く保存しておくに値する。

過熱する聖母崇拜

今週のカバー・ストーリーは、宗教関連の問題を扱ったふたつの記事である。

"Handmaid or Feminist?" (pp. 50-54)では、聖母マリアに関する論議を詳しく紹介している。それによると近年、聖母マリアに対して特別な信仰心を持つ人々が世界各地で急増しているそうである。この事実を反映して、聖母ゆかりの聖地や教会への巡礼も盛

んに行われている。100年前に15人の人々が聖母を目撃したと言われるアイルランドのノックでは、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が1979年にこの地を訪れてから巡礼者が急増し、いまでは当時の2倍、年間150人近くがこの地に足を運んでいる。1986年には巡礼者の便宜を図って国際空港まで造られたという。

聖母マリアへの関心の高まりとともに、彼女に関する論議も盛んに行われるようになってきた。ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世は、欧州における共産主義を終焉に導いたのは聖母マリアである、と考えているようだ。また、彼女を目撃した修道女ルシアによると、聖母マリアはソ連の全体主義の勃興を予言していたという。

フェミニストや修正主義者たち(revisionists)は従来の聖母マリア観に疑問を持ち、彼女の中に自立的な強い女性の姿を見い出そうとしている。

このほかにも、さまざまな立場からの聖母マリア論が紹介されているので、宗教にあまり関心のない方もぜひ一読されたい。

"How to Believe in Miracles" (p. 55)では、前掲の記事に関連する聖母マリアの再出現、あるいは産業化社会の「奇跡的な技術」の進歩などの多様な奇跡に触れながら、ランス・モロー記者が独自の「奇跡論」を展開する。彼の考える、真に偽りのな



マリア出現の地で祈る巡礼たち

い奇跡とは一体何なのか。

それは読者の方々自身で記事に当たっていただきたい。

混迷深める民主党大統領候補選び

さて、米大統領選挙については、United States 欄の "At Last No-Go from Mario" (pp. 42-43) と "Bill Clinton: Front Runner by Default" (pp. 43-45) が論じている。昨年初めの湾岸戦争当時のブッシュ大統領の人気はどこへやら、景気後退 (recession) の中でさまざまな内政問題にあえぐ米国では大統領支持率が40%台に落ち込んでしまっている。

しかし、ここへ来て民主党の大統領候補として最有力視されていたニューヨーク州知事のマリオ・クオモ氏が出馬を辞退すると宣言したのである。歴史的に見てもニューヨークやカリフォルニアといった重要な州の知事のポストから大統領へ、というパターンは数多いだけに、クオモ氏には期待がかかっていた。これで現職大統領のブッシュが盛り返したのは確実であり、大統領選挙は混迷の度を深めたと言える。

54年ぶりの台湾国民大会代表選挙

Asia/Pacific 欄では台湾問題が取り上げられている ("A Solid Yes for Continuity [p. 13]"). 台湾では去る12月21日、注目の国民大会代表選挙が行われた。国民大会は、総統選出、憲法改正の機関であるが、1947年に大陸で選出されて以来、実に54年ぶりの全面改選であり、台湾の政治改革の重要なステップであった。

野党の民主進歩党 (Democratic Progressive Party) は、「台湾独立」を掲げて選挙に臨んだのだが、結果は現状維持を主張する国民党の大勝となり (議席数の78%を獲得)、台湾民衆は、開明的な指導者、李登輝総統の下で一歩一歩着実に政治改革を行い、



クオモ N.Y.州知事、大統領選不出馬を表明



台湾国民は野党に無関心

ポスト鄧小平時代への移行期にある大陸中国の情勢を見極めようとしている国民党に積極的な支持を与えた。TIME ではこの結果をこの記事のタイトル「現状維持への強固なイエス」と見なして報じている。

新国家の今後のかじ取り

ところで独立国家共同体の発足により、ゴルバチョフ大統領の辞任にいたったソ連情勢については、TIME のソ連通のコラムニスト、ストロブ・タルボットが "A State That Deserved to Die" (p. 16) と題して論じている。このような国家をどうやって維持していくかが課題であるが、それは新しい指導者ばかりか、全世界にとってもひとつの挑戦だという同記者の見方は、多くの読者の共感を得よう。

わたしは去る12月26日早朝2時 (日本時間) からのゴルバチョフ辞任演説をテレビで見た。その辞任はやむを得ぬことだったとはいえ、20世紀が生んだ歴史的スターの最後の日として感慨深いものだった。政策としてのペレストロイカは挫折したが、ドイツ統一や東欧民主化など、ゴルバチョフ大統領の登場で20世紀の歴史は、人類の平和と民主化の方向へ進路を取った。ゴルバチョフ登場間もない86年7月のウラジオストック演説を読んだ時の印象は鮮烈だった。従来のソ連指導者の演説と違って本音が語られていたのである。

以来、脱冷戦と脱社会主義、そして核戦争の脅威を全世界的な軍縮へ封じ込めたことの意味は大きい。ゴルバチョフ大統領の功績は、21世紀になっても歴史家たちにきわめて高く評価されるであろう。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)